

1、城陽市冑山1号墳の埴輪（1）

高橋美久二（館長補佐兼資料課長）

1、はじめに

冑山古墳群は、城陽市大字観音堂小字甲畑の丘陵上に所在した古墳群である。1966年5月に、その内の1基の石室の石材が、土砂採取用の機械で掘削され、それが郷土史家の柏井光彦氏によって発見された。その通報によって、急きょ京都府教育委員会が発掘調査を実施したものであった。土砂採取中に発見されたため、前方後円墳の後円部の大部分は失われ、しかも流失しやすい土質のために、古墳の形も地表面からは確認できない状況であった。古墳の周囲をめぐる埴輪列の存在によって、ようやく前方後円墳と判明した。古墳は北30°西に前方部を向ける、全長約30mの前方後円墳で、前方部の幅約17m、後円部の直径約15mと推定された。主体部の横穴式石室は、かろうじて基底部分のみが残ったもので、ちょうど後円部の中央に位置し、入口は南側に開いていた。石室は片袖式で、玄室の長さ3.8m、幅は奥壁部分で2.0m、羨道の現存長3.8m幅1.2mをはかる。調査担当者の堤圭三郎氏は、前方後円墳には本来の別の主体部があり、横穴式石室は後につくられたのではなかろうかと推定した。南山城の前方後円墳を集成して報告した龍谷大学考古学資料室では、この前方後円墳の主体部を横穴式石室と理解し、石室を白石太一郎編年のⅡ形式、石室から出土した須恵器を森浩一編年のⅡ形式にあて、6世紀前半とした。奥村清一郎氏は、最後の前方後円墳が特集された際に、須恵器杯身と蓋などを紹介し、これを南山城最後の前方後円墳のひとつで、久津川地域の南部の首長墓系譜を丸山1号墳（6世紀前半）→冑山1号墳（6世紀前半）→長池古墳（6世紀中葉）に変化するとした。古墳築造の労働力を

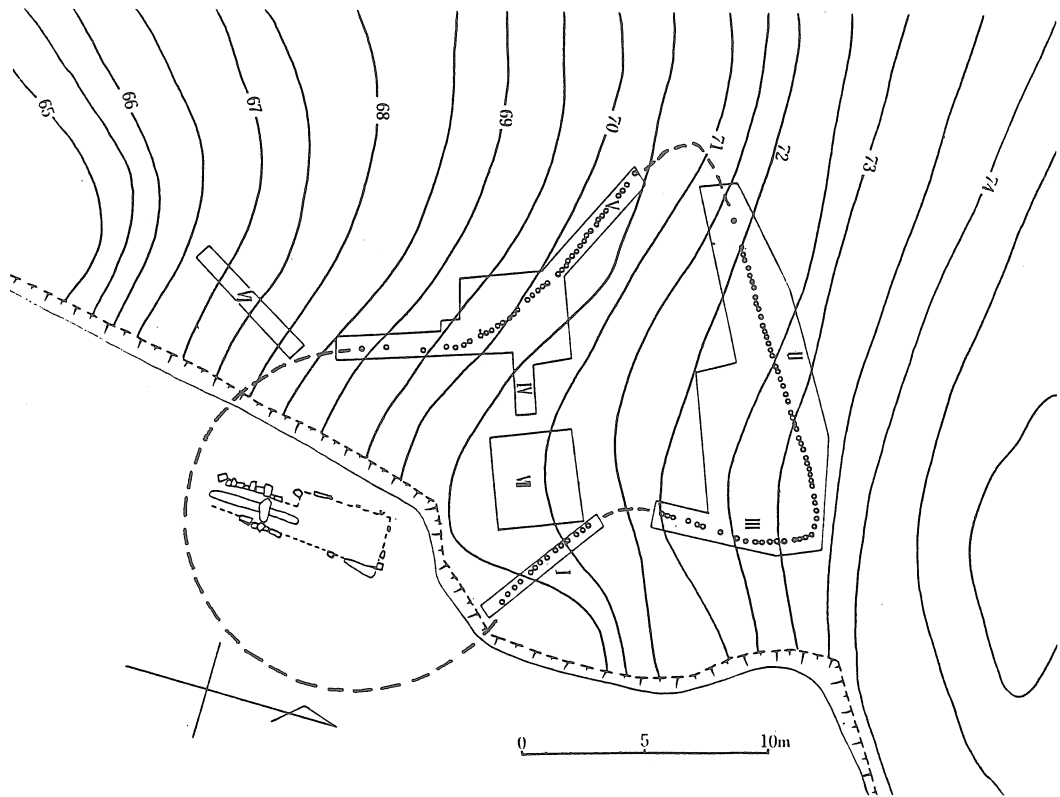


第1図 冑山古墳群位置図（仮製2万分1「長池駅」）

求めるために、前方後円墳の体積を精力的に計算した石川昇氏は、この冑山1号墳の後円部高さを4m、前方部の高さを2mに復元し、土盛り率をCランク（約30%）に位置づけ、その体積を537^{（注5）}m³と計算した。全国の前方後円墳を集成する作業で、山城地域を担当した和田晴吾氏は、この古墳の全長を約28m、後円部径14~17m、くびれ幅約9mと推定し、畿内の前方後円墳編年の9期に位置づけた。^{（注6）}

この古墳の調査以後にも、冑山古墳群では2号墳が城陽町教育委員会によって発掘調査され、その他に8号墳までの番号がつけられた古墳が存在した。したがって最初に調査された古墳は1号墳ということになるが、最初に報告されたときに、番号をつけずに呼ばれたために、冑山古墳といえは冑山1号墳のことを指している。

冑山1号墳では前方部の周囲をめぐるように埴輪列が検出された。埴輪の中には普通の円筒埴輪、朝顔形円筒埴輪のほか、多数の形象埴輪が存在することでよく知られるようになった。形象埴輪は、家・蓋・盾・鶏・人物などがある。とくに人物埴輪は当時府下で唯一の全形のわかる資料として注目された。^{（注8）}



第2図 青山1号墳地形図（注2文献の図に加筆）

その後この人物埴輪は、展覧会の図録や文化財のパンフレットなどにおおいに利用された。^(注9) また、現在では円筒埴輪の編年は、川西宏幸氏の5期分類がもっとも通用しているが、その分類の際の第5期の基準資料として利用した。^(注10) さらに、円筒埴輪の基部のつくり方を研究した荻野繁春氏も、この青山1号墳の埴輪を一带成形の典型例として利用した。^(注11)

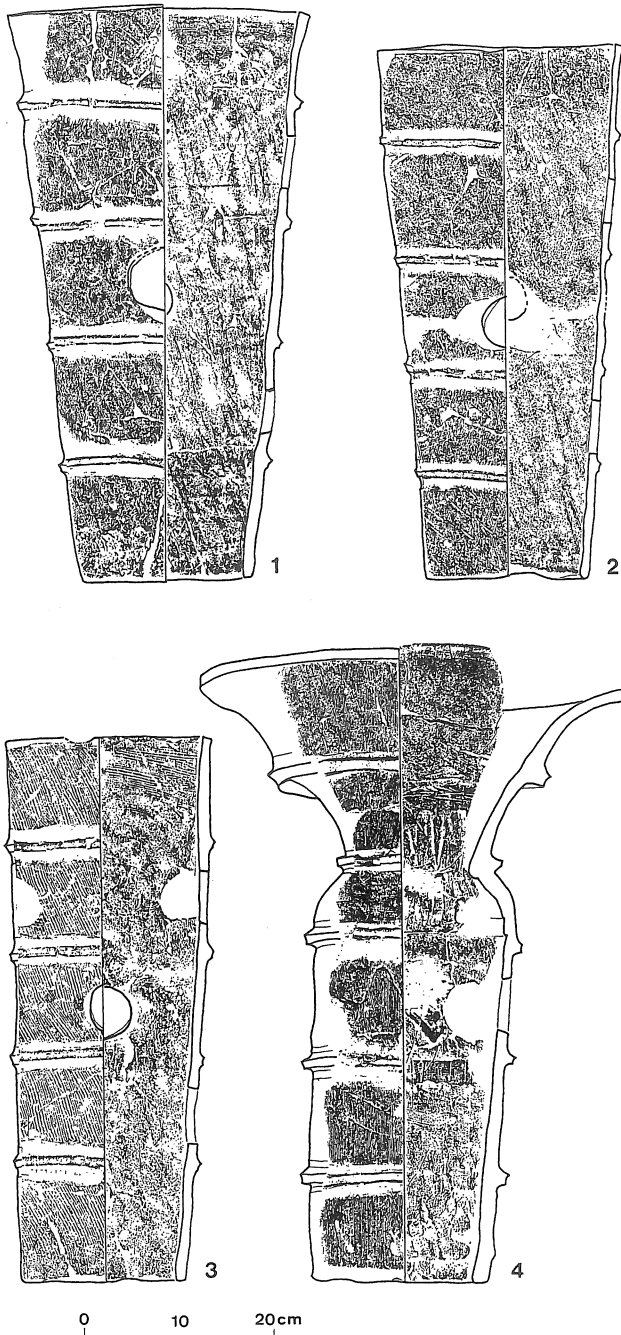
このように、青山1号墳とその埴輪はよく知られた存在であるが、実測図などで報告されたものがなかった。当館では保管中の青山1号墳の埴輪を、90年度から整理、復原等を行った。青山1号墳の埴輪の一部は、発掘調査当時に京都教育大学に保管していただいたままになっていたが、92年度にそれも引き取って整理をおこなった。今年度の整理により、鶏形埴輪がほぼ完全に復元されたり、有名になった人物埴輪が従来の復元と異なることも

わかり、復元のやりなおしなどをおこなった。まだ、整理復元中であるが、とりあえず復元のすんだ円筒埴輪と人物埴輪、鶏形埴輪などをここに報告したい。

2、埴輪の配列

青山1号墳は、木津川右岸の標高65m～73mの丘陵上にあり、東から西にのびる尾根上ではなくその南側斜面にある。そのために、前方後円墳の裾が同一水準の面にはない。したがって、墳丘裾にならぶ埴輪列も同一水準面でない。あたかも斜面にそのまま前方後円形を描き、それに沿って埴輪を並べたかのような前方後円墳である。

青山1号墳の前方部とくびれ部の周囲をめぐる埴輪は、前方部前面で40個、東側で31個、西側で38個、合計108個が検出された。平均して1mに4本の割りりで並んでいたのも、調



第3図 円筒埴輪実測図

- 1—普通円筒埴輪（西14）
- 2—普通円筒埴輪（西32）
- 3—普通円筒埴輪（北3）
- 4—朝顔形円筒埴輪（西？）

査者はこの古墳には少なくとも300個の埴輪が使用されていたことを推定している。これは、調査者が第2図の地形図にもとずいて、推定した全長30mとしての埴輪の本数である。同じ地形図にもとずきながら、和田晴吾氏は全長約28mとし、平良泰久氏は全長約25mと推定した。^(注12)そこで、まずこの埴輪列で示された前方後円墳がどのように復元できるか検討をこころみた。その結果は第2図の復元図のとおりである。この前方後円墳の復元の難しさは、くびれ部が左右対象でないところにある。西側くびれ部はゆるやかな曲線をえがくのに対し、東側のくびれ部はカーブが急であり、前方部前面の直角二等分線は両側くびれ部の中心を通らない。両側くびれ部と後円部の残り部分に整合する円弧を求めれば、第2図のような後円部直径約15mで円が描け、その円の中心は石室のほぼ中央になる。全長は約25mになり、古墳の平面形は「片直角型」ともいえる前方後円墳になった。^(注13)この復元による古墳の全周は約75.5mとなり、1mあたり4本の埴輪を樹立していたとすると、302本となり、調査者が推定した本数とほぼ同じになる。

前方後円墳の外周に沿ってならば原位置を保つ埴輪は、すべて円筒部の基部だけであった。したがって、基部だけではどれが普通円筒埴輪や朝顔形円筒埴輪であり、どれが形象埴輪であったかはほとんど区別がつかない。ただ、盾や人物などの形象埴輪は、円筒の底部外面に突帯をめぐらすことで、円

筒埴輪とは区別できるが、蓋形埴輪や動物埴輪で基部が円筒になるものは、円筒埴輪とは区別できない。また、底部に突帯をめぐらす円筒の基部でも、それが具体的にどんな形象埴輪になるかは基部だけではよくわからない。結局は円筒の基部と周辺で断片になって採集される破片と接合しなければ、当初の埴輪の配列がどのようであったかは復元できない。しかも、接合をはじめてみると、かなり遠く隔たった埴輪片が接合することも多い。埴輪の基部には、それぞれに順番に番号を付してとりあげてあり、その上部が復元されてはじめて、元の樹立位置が判明する。したがって、復元が完成していない現状では、埴輪の配列を復元することはできない。ただ、形象埴輪がどの部分に多く並べられていたかは、底部に突帯をめぐらす円筒の基部の有無によって判断できる。すなわち、底部に突帯のある形象埴輪は、北側列で1本、西側列で6本、東側列ではみつかっていない。このことから、形象埴輪はほとんどが、西側くびれ部付近に樹立されていたことがわかる。

下から上まで全形のわかる普通円筒埴輪は3本、朝顔形円筒埴輪1本がある。復元できた形象埴輪は、人物埴輪1本、鶏形埴輪1本である。

3、円筒埴輪

復元できた3本の普通円筒埴輪は、いずれもタガが4段で、高さ60cm前後ある。かつて、底部から途中までを復元したものに口縁部を接続して、タガ3段で復元したものを紹介したことがあった(『京都府のはにわ』p5、111図)が、3段で終わるものは確認できないので、復元が誤りであったことがわかった。

1は普通円筒埴輪で、西14の番号がつけられた底部に、西30、西33、西37の番号がつけられた破片等が接合し復元されたものである。高さ61.0cm、口縁部復元径約31.8cm、底部径18.0cm、厚さ0.1~0.12cmある。口縁部径はや

やひずみのある約6分の1の破片での復元径である。淡褐色を呈し、堅く焼かれている。黒斑はない。3本の指によるヨコナデによって付けられたタガが4段あり、下から1段目と2段目の間、2段目と3段目の間、3段目と4段目の間に、それぞれ円形の透かし穴が各段に2個づつ対向する位置に、段ごとに直交する方向に開けられる。外面には、タガが貼り付けられる前に施されたタテハケがほぼ全面に残る。内面には、ほぼ全面にタテ方向のユビナデが施され、上から5cm前後の幅にだけヨコハケが残る。底部付近には外面のタテハケも、内面のナデも残らず、内側から指によって押さえて薄くした、底部調整の痕跡がある。

2は普通円筒埴輪で、西32の番号がつけられた底部に、西35と人物埴輪頭付近や西側埴輪列の南半分で採集されたと注記のある埴輪片と接合し復元された。また西32の番号のある破片の一部が西4の番号がつけられた底部と接合した。高さ56.4cm、口縁部径25.6cm、底部径17.6cmあり、厚さ0.6~1.0cmの薄いものである。灰褐色を呈し、きわめて堅く焼かれたもので、いわゆる須恵質の埴輪である。タガや透かし穴の数、成形や調整の痕跡は1の埴輪と基本的に変わりはない。口縁部近くに、円弧を上にする弓形のヘラ記号がある。

3は普通円筒埴輪で、北3の番号がつけられた底部に、北4などの番号のつけられた破片と接合して復元された。高さ58.4cm、口縁部径22.0cm、底部径17.0cmあり、厚さ0.8~1.0cmある。灰色で強い須恵質の埴輪である。成形や調整の痕跡も1・2の埴輪と変わらないが、ハケメが粗いのが大きな特徴である。これも口縁部が約6分の1しか残っていないためか、ヘラ記号はみられない。口縁端部に丸いものがあつた凹みがあり、これは底部調整の際に倒立したときにできた痕跡かと考えらる。

4は朝顔形円筒埴輪で、西側埴輪列のもの



第 4 图 人物埴輪実測図

と思われるが、番号不明である。高さ67.5cm、頸部までの高さ43.5cm、口縁部径45.0cm、底部径19.0cm、厚さ1.0～1.3cmある。淡褐色を呈し、硬質である。タガは円筒部に3条、頸部とラッパ状に開く口縁部の中間にそれぞれ1条ある。透かし穴は円筒部の3段目に2穴を対向する位置に開けるなど、基本的に成形、調整の方法は普通円筒埴輪と変わらない。内面の調整は、ほぼ全面にヨコハケを施す。また、円筒部と口縁部は別々につくって接合してつくる。底部調整は行われていないようで、外面のタテハケは基部まで残っている。内面基部には粗いナデの間に輪積みの痕跡がそのまま残っている。

4、人物埴輪

冑山1号墳をもっとも特徴づける埴輪で、頭部は西側くびれ部で出土し、離れて出土した胴や腕と接合したと報告されている。今回の整理作業で、頭部が出土した位置付近で採集された円筒の基部と接合し、これが西17、西29、西31と番号のつけられた破片とも接合した。これにより、全形が判明するとともに、樹立されていたおおよその位置が判明した。樹立された厳密な位置そのものはわからないが、円筒埴輪の列の中の一本として立てられていたのではなく、くびれ部に埴輪列とは別に立てられていたようである。

上着より上を表現する男子の上半身像で、下半身以下は表現せずに円筒の台にのる。頭には円筒形の冠をかぶり、頭頂部を塞がずに、開けたままである。冠には鋸歯状の線を刻み、下端には帯状のものが巻かれ、正面で結ばれている。髪毛は両側におさげのように垂らした美豆良であったと思われるが、痕跡のみである。上着は左前に合わせ、首まわりと左衽(おくみ)の縁には、縁飾りの刺繍を線で表現している。腰にはバンドをまわし、小さい刀をさしている。この刀の鞘には、石製の刀子に見られるような縫目が表現されているの

で、革製の鞘に入った刀子であったかと考えられる。左腕は胸の前にまわしているが、右腕をどうしていたかはよくわからない。手首には腕輪をはめている。円筒の1段目の側面と、胴部の腋下に各一对の円形透かし穴を開けてある。

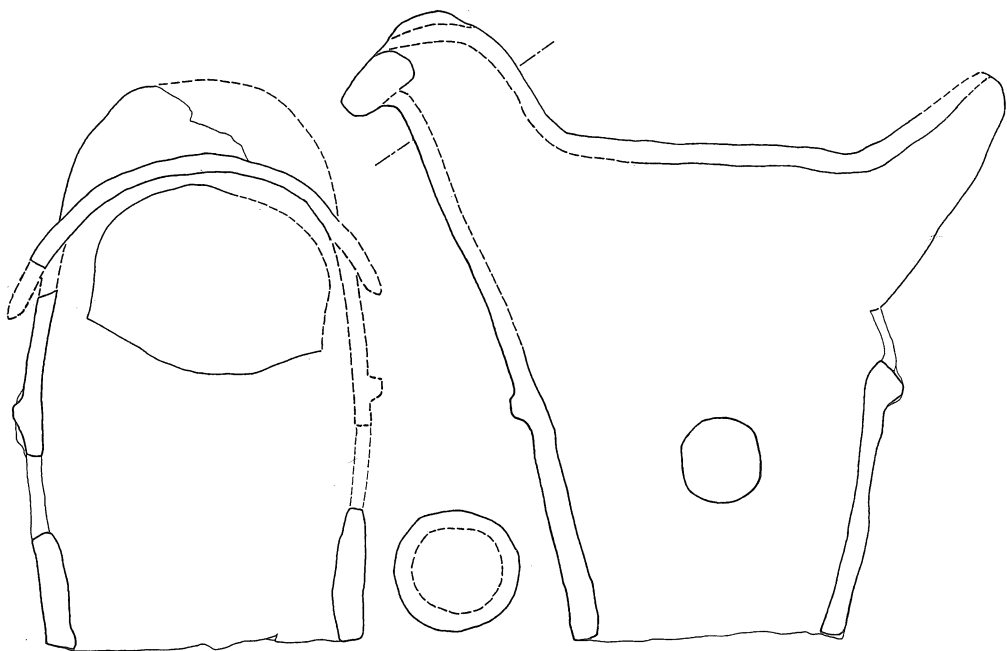
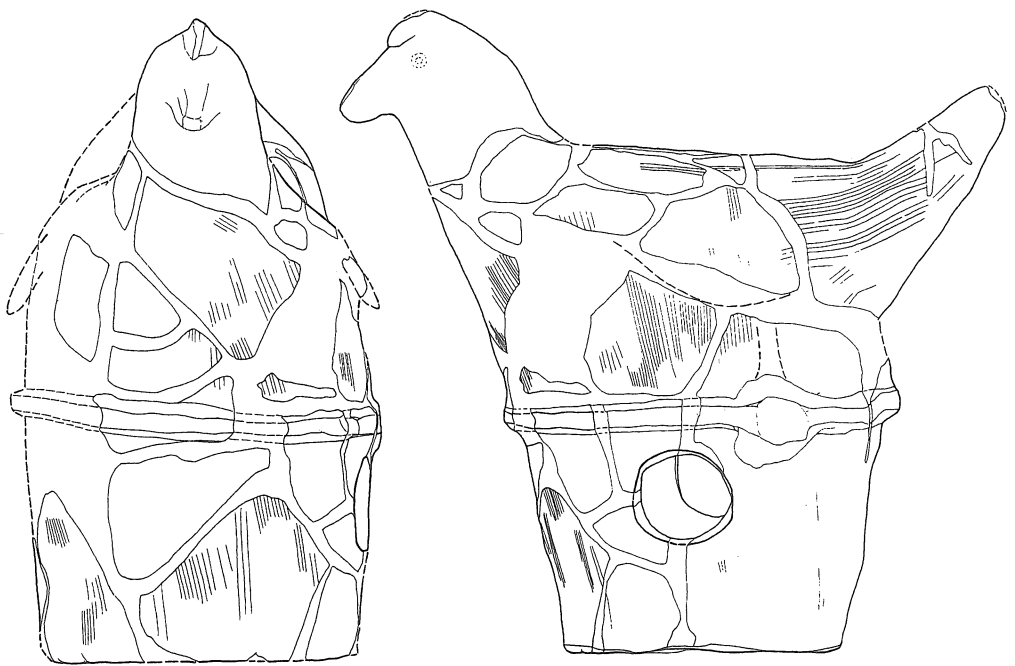
総高80cm、台を除いた人物部の全高56cm、胸付近の最大幅25cm、頭頂部径11.2cm、台の円筒部の高さ30cm、底部径18.3cmある。淡褐色を呈し、硬質である。

この人物埴輪のつくり方は、頭、胴、両腕、円筒の台の5つの部品を、それぞれ輪積みによって中空につくり、それを接合している。首と胴の接合部は、胴部上に開いた穴に、首の円筒を押し込み胴部側の粘土を外側に、首部側の粘土を内側にナデつけて接合部の痕跡を消している。腕の接合も同様であるが、内側の接合の痕跡は消されずそのまま残っている。円筒の台と胴部の接合は、裾広がりの上着の下に円筒部を入れて、腰のバンド部分で内側からナデつけて接合する。円筒部は、普通円筒埴輪をつくる要領でつくった後に、倒立させて使用している。そのために、外面のタテハケは上から下に向かい、底部の径が大きく上すばまりに上部の径が小さくなっている。円筒の基部には、タガとは異なる幅広で低い帯を貼りつける。

5、鶏形埴輪

従来頭部だけが知られていて紹介されたり(注14)していたが、今回の整理作業でほぼ完形に復元されたものである。注記のない頭部片と、西側埴輪列南半分と注記されて一括採集されていた破片などと接合して復元された。

円筒の低い台の上にうずくまったように表現された小型の鶏で、とさかの存在により鶏とわかるが、全体に風化がはげしく、目やくちばし、羽、足などの輪郭ははっきりしない。とさかの表現などから、めんどりを表現したものであることがわかる。羽は左右に胴部か



0 10cm

第 5 图 鷄形埴輪実測図

らはみ出すように表現されていたようである。羽の下からのびた足が円筒のタガに達していたようであるが痕跡のみである。円筒部側面に一對の円形透かし穴が開けてある。

全高33.6cm、くちばしの先端から尾の先端までの長さ35.2cm、正面からみた最大幅現存で17.4cm、羽の先端がどの程度あったかわからないのもう少し幅広くなるはずである。円筒部は底部で、前後の径14.6cm、左右の径16.8cmでやや楕円形を呈する。色調は淡赤褐色で、やや軟質である。

この鶏形埴輪のつくり方は、表面の風化が著しいことや、接合部の残り方がよくないことなどから不明なところもあるが、つぎのように復元される。円筒の台と鶏の下半分までは、円筒埴輪と同じようにつくり、その上に背中と羽根にあたる粘土板を屋根をかけるように覆いかぶせる。それに首をつぎ足すように輪積みでつくりつけ、最後にくちばし形の粘土塊で塞ぎ外面だけていねいに痕跡を消す。内側の調整は尾側の方の穴から手を入れておこない、最後に尾にあたる粘土板を貼り付けたようである。尾羽根の下は大きく穴が開いたままである。

(注1) 柏井光彦「柏井レポート 1・2・3・4・5・6」(『月刊南山城』2・3・4・5・6・7号、1977～1978年)

(注2) 堤圭三郎「冑山古墳発掘調査概要」(『埋蔵文化財発掘調査概報(1967)』京都府教育委員会、1967年)

(注3) 龍谷大学考古学資料室『南山城の前方後円墳』(1972年)

(注4) 奥村清一郎「特集各地域における最後の前方後円墳 京都府南部」(『古代学研究』104号、1984年)

(注5) 石川昇「旦波・山背の前方後円墳と体積」(『京都考古』40号、1985年)

(注6) 和田晴吾「京都府」(『前方後円墳集成 近畿編』山川出版社、1992年)

(注7) 堤圭三郎『冑山2号墳発掘調査報告書』(プリント、城陽町教育委員会、1967年)

(注8) 林博通「京都府久世郡城陽町観音堂冑山古墳について」(『史想』13号、1967年)

(注9) 京都府教育委員会『京都の文化財南山城編』(1969年)

京都府立丹後郷土資料館『開館記念古代の丹後展』(1970年)

京都府立山城郷土資料館『南山城の歴史と文化』(1982年)

宇治市歴史資料館『よみがえる古墳文化』(1986年)

京都府埋蔵文化財調査研究センター『京都古代との出会い』(1990年)

京都府立山城郷土資料館『京都府のはにわ』(1991年)

芝山はにわ博物館『はにわ人の服飾』(1992年)

(注10) 川西宏幸「円筒埴輪総論」(『考古学雑誌』64-2、1988年)

(注11) 荻野繁春「円筒埴輪成形技法の一断面―基部のつくり方について―」(『福井考古学会会誌』2号、1984年)

(注12) 京都府教育委員会『京都府遺跡地図 第5分冊(第2版)』(1985年)

(注13) 石部正志・田中英夫・宮川渉・堀田啓一「前方後円墳築造企画の基準と単位」(『考古学ジャーナル』150号、1978年)で「片直角型前方後円墳」とされた。最近では、この片直角型を継体天皇の時代に、新興勢力継体側に対抗した旧勢力側のオールド・タイプの古墳とする説がある。平良泰久「丹波の倭彦王」(『長岡京古文化論叢Ⅱ』、中山修一先生喜寿記念事業会編、1992年)

(注14) 田名部雄一他「シンポジウム・鶏の考古学」(『古代学研究』114号、1987年)

京都府立山城郷土資料館『京都府のはにわ』(1991年)